

有名キャラ官能小説CG集第406弾!!!



がほいやーらしがーんてむらさき

# ソング サウンド ザガ

Win 91位 Mac 91位 16MB Memory 1024x768 32bit Color 対応 CD-R 対応 成年向

























「いいねー、可愛いねえ。

こんな若い娘たちに中出し種付けし放題なんて、やる気がそそり立つってもんだ」

オマンコをズッチュズッチュ言わせつつ、チンポをリズムカルに出し入れするおじさん達。

既に何度か射精したか、はたまた泡立った愛液なのか、白いものが付着している。

「んっ、あっ、んんっ！ ど、どうかよろしくお願ひしまーす…っ…あっ、やんっ！！」

健気に頑張るさくらの態度に、おじさんの一人がうんむうんむとニコやかな笑顔で頷き返す。

「もちろんだとも、任せておきなさい。きっと君たちをトップアイドルの頂に上げてあげるからねえ」

これはいわゆる“接待”だ。

メンバー全員で股を開き、好きに犯してもらうかわりに、各方面にているいろと便宜を図ってもらう。

れっきとした取引であり、こういった場を得られないアイドルも星の数ほどいると考えれば、

彼女らはチャンスに恵まれたとってよいだろう。しかし——

「んああっ！ はっ、はっ、んくううっ、ふ、深い…っ、ああっ、あっ！！！！」

「いい声だねえ、きっと人気が出るよー愛ちゃん。CDリリースについては安心したまえ」

「あ、ああっ、ありがとう…ございますうっ！ んっ、んっんぐっ、ひっ…あ！！」

「はは、まさかの男の娘とはね。だがいいアナルだ…こういうのも悪くない。

見た目もいいし、こういう秘密も大きな武器となるからね、いいよリリィちゃん」

「ありがとございますっ、んっ、き…きつついけどリリィ、ガンバリマスねっ！！」

「その反抗的な目つき…グッとくるねー。

そういう目を媚びてトロントロンに蕩けさせるのがおじさん大好きなんだよ、サキ君」

「う、うっせー！！ 気持ち悪いことってんなよっ?! い、いいから早く終わりやがれ…っん！！」

全員がズッポシとチンポハメられ、悶えさせられている。

一回り周囲の様子を伺ったさくらは、困惑の度を深めていた。

「はあはあ、こ、これが…あい、どる…? んっ、んっ…こんな、事…ば、…はあはあ、せないかんと…っひうんっ！！」

**ドグッドクンッ！！ ビュービューツビュビュウッ！！！！**

熱弱い体に、また熱さが注がれる。

孕まないとはいえ、心にくるものがあった。

煌びやかで華やかなものの裏側……それを知ったさくらの胸中は、大きな衝撃と今後への不安で埋め尽くされていた。



記憶を思い出せない——その療法には自然に思い出させる方法と、ショックを与える方法ある。

「…だ、だからってえ！！ あっあっ、こ、これは違うんじゃないかとーっ???!」

「いや、さくら！ これが最適解、いや、最善、最強、最高の方法ぬあのだっ、フンフンフンッ！！」

巽は、彼女のマンコにぶち込んで、カクカクと軽妙に腰を震わせていた。

「はぁはぁ、そ、ゾンビなんですよ?? こ、こげなことしてっ、あっあ、へ、平気とねっ??？」

メイクを隅々まで施しているとはいえ、それは変えようのない事実だ。

しかし巽には、そんな事は些細と言えるだけの理由がある。が、それを言う必要もない。

「あ——ったり前だ、バカ者ー！ ゾンビ、大いに結構！ それがどーした、くうう俺の腰がゾンゾンするーうっ！」

意味不明な勢いとノリ。

いつも通りではあるが、若干の無理をしてる感も否めない。

だがそれが、嫌悪感からくるものではない事など、さくらには知る由もない。

「あうっ、んん！ ゆ、ゆうぎりさん、そ、そこダメと…んっ、ひやああっ！！」

メンバーの中では大きい方だ。たわわなモノをお持ちなさくらの先端は、ピンと張る。

「……」

巽は、つい涙ぐみそうになった。サングラスで見えないとはいえ、拭いそうになる。

分かっている。彼女が生き返ったわけではない事くらい、重々理解している。

感傷を振り切るように、巽は腰を早めた。

「んひいい！！? あっあっ、ま、まったんね!? そ、そげに激しいっ、んんんっ、ひーっ！！」

「ゾンビのくせに、このくらいなんでもなかるうっ！ ふおおおおおっ、イケよべいべ——っい！！」

ビュドッ！！ ビュクッビュクンッ！ ドックドックドック…

「んんんん——！！！！ …な、中に出したと……あ、気にすん必要はなかが…」

現実を思うと、気持ちが生々となる。そして、何かを思い出す事もない。

だがそんなさくらと違って、巽は何かを思い出して思わず背を向け、流れる涙を急いで拭いた。。



「ど、どないなっと…くうっ！ や、やめー、やめえって！！ あっひ…ひうっ！！」

万梨阿は怯えきって、抵抗などなくやられ放題。

ある意味では、相手の目的を達するに至っていると言えた。

しかし母親は違う。娘とは経験も根性も段違いゆえに、なかなか落ちる気配はなかった。

「こやん事しとうて無駄やけん…んっ、早いとご謝っと一方がよかよ？」

ガッツリとハメ犯されているにも関わらず、

諭すようにやんわりと…しかし奥深いところに気迫が宿った語り掛け。

人妻と、元レディースの精神的強みとそのあられもない姿にも滲んでいた。

「んっ、…こないにいくらされようて、どーにかなるもんやなか…なかなかのもんやけんども」

熟れた身体に、犯される姿は独特の色っぽさがあった。

例え旦那以外の肉棒が、その操を穢そうとも僅かな揺らぎもない。

不貞云々など上等。

根底にある気合いと性根の強さゆえに、穏やかに見えて強かな母は決して屈しない。

だが…娘は違った。

「ひいいっ、こ、こげんなこと、もう…もうっ、あつあつ、あたしばもうっ…うううっ！！」

根っこまで不良になり切れてはいない。時代がそもそも違う。

ただのごっこ遊びのレベルでしかない万梨阿には、母の麗子のような心底に強いものはない。

「ひふっ！ うんっぐ…はあはあっ、あっあっ、ひいいっいっ！！」

処女の失えば泣き、犯し続けられれば怯え、中出しされれば恐怖する。

所詮は現代っ子———忍耐力と気概と潔さという点において、遥かに脆かった。

「わ、わかったけん！！ もう、もう突っ張るんやめえ！！ これ以上あたしん中、だ、出さんとおってえ！！！」

**ドグッ！！ ビュルルッ！！ ビュグンツ！！**

「ひ、ひいいいいいいいっ！！！！？」

**ビュゴッドグドブッ！ ドクドクッ！！ グブブッ！！！！**

懇願とは逆に、大量の中出しを受ける万梨阿。

それをむしろ本人よりも冷静に見ていたのは、他でもない母の麗子だった。

中出しされる程度でこうも慌てふためく———

やはりかつての自分のような真似は出来ない子であると理解し、

むしろ母としては子の素質の無さに安堵感を覚えていた。



「ほんに今世のお座敷には、浪漫いうものがありはしませんのやなあ…」

これでもかとアソコの奥深くにペニスを叩きつけられながらも、余裕のあるゆうぎり。はたして生前、いかな修羅場をくぐり抜けてきたかがその態度に表れている。一方で…

「おぐっ、そんな深くっ、く…くんじゃねえっ、よ。ドスドスとしつこか…んひっ！！」

突っ張ってはいても世情的に、男性経験などなかったサキは、苦戦を強いられていた。二人は少し大きめの会場でのライブ後、観客席にいたいかにもな男の“ご指名”を受け、こうして夜のライブに挑んでいた。

「サキはん、もっと楽う構えんと、続きませんよって。気い張り過ぎとおあきまへんえ？」

大きな乳房をこねくり回されながらも、仲間にアドバイスする余裕。本来ならばそういった態度は、男の気を逆なでするもの。だがゆうぎりは、全身から溢れる“やり手”のオーラゆえか、むしろ彼らは真に“いい女”に相対する喜びで、丁寧かつしっかりと味わうように彼女を犯す。

「おふっ、くう…んなこと言われてもよっ。はーはー、こがらしか連中にいいようにまわされて、はぁはぁっ」

だがサキには乱暴なやり方だった。いう事のきかない尖った態度——それは彼らのやる気を、この女を組み伏せるという意味で粗暴な方へと誘導してしまう。

「んごお！！？ んだからよおっ、はぁはぁ…カいっばいぶちかますばっかで…んぎいっ？！」

「いけまへんえ、わてらは我が身商売…傷つけるんはご法度ですんえ、猛りはどうぞこちらへ…」

ゆうぎりが、はんなりと流麗な手つきで自身の子宮がある辺りを示すと、男のペニスはギンツと膣内で強烈に反応を示した。相手の心に働きかける言葉と仕草——それは、男が女に対するに有効ではあるが、逆もまた然りなのである。

「んっ、はぁ…さあ遠慮はいりまへんえ…どうぞ思い切り種付けしてくんなまし…」

**ビュゴウツ！！ ドグドグドグッ！ ビュルルルツ！！ ビュウウーッ！！！！**

受け止める精が、決して根付かないと理解はしていても、女の幸せを想って打ち震えずにはいられない。ゆうぎりは、全てを受け止めきると同時に大きく静かに、天井へと向けて息を吹いた。



「うー？ うーあー…あーうー…うっ…、あー…」

感じている———のか？ 果たしてその反応からはまったく読み取れない。  
同じ場に臨む仲間の反応が、リリィにはいまだ掴めず、少しばかりどうしたものか困惑していた。

「ううんっ、…はあ、はあ…たえちゃん、ちゃんと分かってる?? 頑張らなくっちゃ駄目なんだよ??」

「…?」

小首をひねる仲間に、心中でどうしたものか困惑する。  
ともすれば不感症と取られかねない態度だ。  
しかし今のところ、たえに対する相手の反応は意外と悪くはない。

「(なんとか乗り切れるかなあ…枕営業に私達二人ってどーなのお??)」

普通に考えてもキャストイングミスだとしか思えない組み合わせだ。  
しかし、何かあるのだろう。巽の指示はこれまでも何だかんだで危うくも上手く行っている。  
リリィはそう思う事にして、仕事を果たす事に専念しようと直腸の締めりを強めた。

「うー…んっ、うーあーうううっ、んんううっ、あーあ”あ??」

たえが受けているのは、その身体つきに由るところが大きいのだろう。  
メンバーの中では上位に食い込むスタイルだ。  
あるいはアソコの具合も、意外にも良いのかもしれない。

「あっ、あーっ…うう”うっ、んああっあ、あー—っ」

呻いているばかりだが、それも聞きようによっては喘いでいるように聞こえなくもない。  
事実、たえが呻くほどに男の腰はより早く激しく動いているようにも見えた。

「うっ…あっ、んんっ。はあ、はあっ！ たえちゃん、へーき？ ちゃんと耐えられるよね??」

「ううう??」

ここまではなんとかだ。しかし、最大の難関は射精された時。  
果たして彼女が中出しされる事で、どんな反応を示すのか？  
もしも暴走でもしようものならリリィにはとても抑えられないという危惧があった。しかし———

**ビュゴルッ！！ グボボッ、ドグウウッ！ グビュッグビュウッ！！**

「おあああ?? んっ、あったお…おおおっ、あっ、あー—…あっ！！」

「(よ、悦んでる?? 中出しされて悦んでる…っばい??)」

よくは分からないが、少なくともたえは射精の衝撃に驚いて暴走する、といった心配はなさげで、  
リリィは安堵しつつ、自身の腸内で男の熱い白濁液を受け入れた。





「はあ、はあっ、はあっ…こんな、事が…今の時代にもまだっ、ああっ…あるのですか…っ」

純子には覚えがあった。かつての時代、熱狂しすぎたファンが行き過ぎた行為——暴漢となるケースを。これはそれなのだ、彼女は思った。しかし——

「はあはあ、違う…もっと、ヤバイよ。この、状況はっ…あんん！！」

だが愛の危機感はより巨大だった。

ファンの延長上であれば、絶対的な危害を加えはしない。

下手に拒めば殺して永遠に自分のものにする、という拗れた輩のケースはあっても、

あくまでファンである以上、彼女らに危害を加える事は、本来はない———そう、熱心なファンであれば、だ。

「はあ、はあ…くうっ！ あなた達、いい加減にしないと、どうなるか…んああっ、わかって…っ」

だが予想通り、愛の言葉に物怖じる男達ではなかった。

ニタニタ笑いながら、ひたすらに犯してくる———生前ならばパニックになったであろう事。

だが今は、どんなに犯されようと何の問題もない。何なら孕ませられるっていうなら孕ませてみろと吐き捨てられる。

「うう…こ、このままですと、はあはあ、うんっ、んっ…あっ、わ、私達…どう、なって…あんっ！！？」

純子の奥で、龟头がズシンと突き上がる。ごく僅かだが、その衝撃で内のどこかが崩れたような気がした。

メイクこそまだ問題なさそうだが、このままでは非常にマズイことになる。

「ふーふーっ、く…う…んっんっ！ …はあはあ、とに…かくっ、こいつらは…ヤバイ、から…ぜ、絶対逆らっちゃダメ…だからっ」

そこで言葉を途切れさせ、愛はビクンツと身を震わせた。

**ビュドビュルビュグビュウッ！！ ドクッドクッドクッドクッウ！！！！**

胎内を打ち付けるザーメンは、中出しされた証。

だが、恐れるのはそれではない。“もう”射精されてしまった事だ。

「(マズイ、もっと長引かせないと！ ……このままじゃっ)」

彼らはファンではない。アイドル喰いだ。

純粋なファン心を持っているのではなく、

最初から悪意でもって駆け出しの、まだ世間的にも背後的にも力のないアイドルを狙い、隙を突いて然るべきところに連れ込み犯す。

そしてヤバイのになれば、やり終えた後に証拠隠滅のために殺害するなんて狂った連中もいる。

だが彼女達はイザとなれば、殺されても問題はない。

しかしその時、100%確実に秘密がバレてしまう。大騒ぎになればアイドルどころではない。

生前よりアイドルだった二人としては、それはどうしても避けたい事だった。



「だ、だめっ、そこはゴシゴシしちゃダメっ」

お尻の穴を突く肉棒はあまりに大きく、それだけでも内側から崩れてしまいそう。だがパレるわけにはいかないと、リリィは踏ん張っていた。

「こ、こんなところまで…あの子にそっくりだなんて…っ」

パピィは、完全に何かおかしくなっている——  
それは確かだった。

本人と気づいていなくとも、自分の娘とそっくりな子を手にかけるなど、リリィの知っている父ではない。

「あっあっあっ、ら、らめえっ！！ な、なにか出ちゃう、れちゃうからあっ！！」

それは生前に溜まっていた体液か、はたまた別の何かなのかは分からない。生命活動を行っていないカラダが、新しい精子を精製するはずがないのだから。——それとも、奇跡というものはあるのだろうか？

「らめ、あっ！！ なにか、何かあがってきちゃううっ、搾り上げないでえっ！！！！」

射精の衝動は、あるいは力強い手コキゆえなのかもしれない。尿道を駆け上がるのは本人の生理現象ではなく、外部からの物理現象によるものなのかもしれない。でも、それでも…単なる錯覚であったとしても、この時のリリィを襲う衝動と感覚だけは本物だった。

ビュルルッ！！ ビュシュウッ！！

「はあはあ、出る…うおおおお、まさお…っ、おおっ！！！！」

ドグドグウウッ！！ ブグブググッ！ ドビュルッ！！！！

亡き我が子を想って、複雑な心が交錯しているパピィの気持ちは、分からないではない。だが今はとにかく、メイクが剥がれて正体がバレてしまわぬよう努めるので、リリィは精一杯だった。



「はあ、はあ…はあっ、ど、どうなっているのでしょうか??

今の時代の警察の方は、このような事になっているんですか??」

純子が不思議に思うのも無理はない。

世の人々の安全を守る立場の人間が、まさか…

「…ふう、んぐっ。ま…不祥事って形で、私が生きてた頃も時々報道されたりはあったけどさ…」

まさか集団で強姦に及ぶなど、愛もビックリだとばかりに首を横に振った。

「や、やめんとっ、はあはあ、んんん!! こ、こん事したらいかんばいっ、あっあっも、問題になるとー!?!」

さくらは困惑しながらも、警察官に懸命に訴えかける。

まさにこれが、ニュースで報じられる警官の不祥事案件そのもの。

彼らの所業は後に明らかとなり、彼ら自身に報いが返ることになるのは目に見えている。

「ははっ、やかましい! んな事いってると、脅迫罪で逮捕するぞおっ、ふはっ、ははっ!!!」

完全にハイになっている。

3人のマンコに自分の精子を打ち込む事で頭がいっぱいなのだろうか。

分かっていないはずはないのに、その腰振りには一切の躊躇いがない。

「んっ、はっ…んうっ、くっふっ…ん! …ですが、少しまじいかもかもしれません、…はあっ、あんっ…!」

純子の危惧——それはこの警官たちの不祥事を訴え出るとしても、大きく報じられる事になる懸念。

いわゆるアイドルのスキャンダルだ。

そしてそれは、愛にしても奥歯を噛み締めるほどどういう事が理解していた。

「(訴え出られない! 今のご時世、すぐに情報は拡散するし、根も葉もない噂とかも出回って…)」

被害者なのに、アイドルを続けられなくなる。問題は、現在よりもこの後をどう処理するかにあった。

「あっ、あっ、や、やめんとっ! そないばことしたらあかん言うとおにっ、はあはあ、お巡りさん、御願いやけんっ!!」

だが、さくらの純粋な願いもむなしく、その胎は一気に満たされる。

**ドグンッ!!! ビュビュルルルッ!!! ビュグツウ!**

中出し射精…それはいい。問題は、その事実の方をいかに闇に葬るかだ。

情報をシャットアウトし、彼らが刑務所行きになっても、いずれ出てくればその口はどこかでこの事を喋らないとは限らない。

情報化社会にあってこのスキャンダルは、

彼女達にとって最大級の危機としてそのマンコより白濁液と化して流れ出ては広がっていった。



**ズッコズッコズッコ……**

「(やべえ、もう貫ったヤツ、切れてきやがった…っ)」

生身でない分、今更臆するものでもない———A Vの仕事。  
だが、ゾンビだとバレないようにするためには、何かと準備が必要だった。

**「はぁ、はぁ…こ、こないに激しいするもんと?? 休憩もなかって…んっ!!」**

さくらもどこか焦っている。恐らくは彼女も“切れた”のだろう。

そう、本当ならば撮影途中で胎内に補充するはずだった潤滑油。

愛液の代わりだ。

実際、分泌は奥から出てくるため、

子宮に愛液代わりの潤滑油を充填しておけば誤魔化せるし、実際に誤魔化せてきた。

しかし…

**「あれ、濡れがイマイチになってきたな…。さすがにぶっ続けでやって慣れちゃったかな?」**

**「ああ、…いい、いい加減ちょっと休ませてもらいてえんだけどな、こっちはよ?」**

サキが、かなり本気でガン飛ばしながらやんわり請願する。

だが、逆だった。相手役の男達も現場を取り仕切る監督も、逆の判断をした。

**『そのまま続行! リアルな疲弊感が、輪姦されてるカンジでいい。負担減のためにも一発決めだ!!』**

**「だとさ。ま、もうちょい頑張っってよ、アイドルなんだろう?」**

どういう理屈だそれは、と噛みつきかけるサキだが、下手な事をするとなら内どころか表面もボロが出かねない。

もうそれなりの時間をやられている。メイクだって果たしてどこまで持つか…

さくらもその辺り気にしているようで、なるべく動きや揺れを抑えるような感じで相手をしている風だった。

**「はぁ、はぁっ、お、大きいの…これ以上っ、は、はいらんと…っ、はぁはぁ…もう、もう終わりに——」**

それは半分本音だった。

だが、台詞がシチュエーションにマッチし、スタッフ達からは好評を得る。

**「いいね、そそるよそのアドリブっ! 一気にいくよっ」**

男優が腰を早める。思いっきり揺らされてしまい、

慌てふためくもそれも状況にマッチして、意図せずして彼らの期待に応えてしまっていた。

**「あっあっあっ、いかんとっ! これ以上激しくせんとっ、ダメはいっ、あっあっあああ!!」**

**ビュルルルッ!! ドクンッ!! ドクッドウッ!!!**

その日の仕事はそれで終わり、二人はバレずに済んで助かったと安堵した。

だが、結果として彼女らの演技が客・スタッフ共に好評で、

幾度となくA V仕事に呼ばれる事になってしまうのは、また別のお話…



「はぁはぁ、はぁ…はぁ……どうりで、私達だけのはずですね…」

——さくらやたえはまず無理。

——リリィは理解はしているだろうが幼過ぎる。

——サキは何かのきっかけで先方に無礼を働きかけない。

——ゆうぎりは、一番最適かもしれないが時代が違いすぎて、やり方に問題が生じかねない。

純子は、なんとか一息つきながら、そう得心するに至っていた。

「んぐっ！ はふっ、はぁはぁ…大丈夫、このくらい、…私達だけでこなせば、何も…何も問題ないし」

愛と純子が二人だけで向かわされた仕事。それはいわゆる枕営業だった。

理由はわかる。恐らくは活動資金のためだろうと。

だが、ある意味でこれは願ってもない仕事でもあった。

「ふう、大丈夫です。

お気遣い頂き、ありがとうございます。引き続きお相手を務めさせていただきますので…」

そう言って純子は再び股を開いた。

時代は一つ違えど、アイドルという業界の闇に潜むものは変わらないらしいと、純子はいきなり苦笑する。

入ってくるチンポは、かつて表向きは処女で純潔を通したアイドル達を貫く闇の肉棒。

ましてや今の身体で、清い身も何もない。

「はぁっ、はぁっ、んっ、あっ、んっん！！ はぁはぁ、もっと…お願いしますっ」

感覚が弱い。愛はより激しくされるのを望む。

意識して喘ぐのも一苦労だ。だが本当の感覚の通りにすれば、一切喘げないだろう。

「(とにかくここで気に入られて、資金をしっかりと貰えれば——)」

アイドルという活動に対し、特に本気である二人である。

自分達が股を開き、アンアン言うだけで多額の資金が提供されるというのであれば、これほど安い代価はない。

恋をし、異性と結ばれる未来などその身に望む事が出来ない以上、異性に犯されることに抵抗感もなかった。

「はぁ、はぁあっ！ だ、出して…中にっ、いっぱい出して下さいっ、んっあっ！！」

ビドゥッ！！ ビリュ！！ ドルルブッ！！ ドフッドクッドゥッ！！

それでも……心というものはある。

中出しされた瞬間、感じる事はないだろうと思っていた嫌悪感が、哀しみが二人に沸き起こってくる。

その表情は、幸いにも男達の気持ちを煽ってくれ、仕事を成功へと導いてくれる。

だが、全てが終わったあと…やはり二人は、涙を堪えきれはしなかった。